防長三奇橋の一つ
2径間の石刎橋

盤石橋（ばんじゃくきょう）

大寧寺（たいねいじ）は、天文20年（1551）大内義隆が陶晴賢（すえはるかた）の反乱により一族郎党とともに自刀した地であるように、歴史ある寺です。この寺の横を流れる大寧寺川に架かる盤石橋は自然石を積み上げた石刎橋（いしはねばし）です。初代の盤石橋は寛文8年（1668）、燈外（とうがい）和尚の時代に架けられましたが、現在残る橋は宝暦14年（1764）、呑海（どんかい）和尚の時に再建されたものです。この橋は、かつて岩国の錦帯橋、山口にあった虹橋と並ぶ「防長三奇橋」のひとつに数えられました。材料は玄武岩で刎石、桁石ともに厚くて短いのが特徴ですが、瀬戸内側の桝築欄干橋（防府市）の花崗岩製に比べていかつい印象を受けます。

石刎橋はわが国でも山口県と大分県にしか見られないほど、貴重な橋といえますが、石刎形式では径間を広くとることができないため、本橋も中央に大きな橋脚を築き2径間（全長14.2 m）にしています。これは全国でも岡山の藤田の石橋と2例しかみられません。山口県内で最も古く、唯一の2径間の刎橋である盤石橋。九州の石アーチ技術が伝わっていれば、存在しなかったかもしれません。

橋の畔の巨石に漢詩と建設の記録が刻まれています。燈外和尚の作といわれる漢詩は、中国宋時代（10世紀ごろ）の仏教書「碧巌録」から、中国趙州に住む従信禅師の故事が引かれています。

同じ北浦筋でも豊浦町の石刎橋である濱井橋は、明治9年（1876）架設のためか、瀬戸内海に近いためか花崗岩で造られています。河川の拡張工事に伴い一旦は取り壊されましたが、石組みを除いた部分は豊浦町小串の夢ケ丘運動公園内に移設されています。石刎橋は近世の架設がほとんどで、近代の架設は珍しい橋といえます。桁橋5本の花崗岩（厚さ0.25 m、幅0.35 m、長さ5.5 m）が小川を跨ぐ様は、力学上・技術面からも無理がないように見え、安心感を感じさせてくれます。

盤石橋（橋長14.2 m）
ドイツで開発されたゲルバー橋（1868）よりも以前に、突桁式工法の架橋技術が日本にあったことが推測される。

■位置図

大寧寺本堂

中央の大きな橋脚が安定感を漂わせる

盤石橋の桁

濱井橋（橋長9.3 m、橋幅1.8 m）の桁